

方向

第一七三号

一九九五年七月三〇日

京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

李賀歌詩編

(訳注稿 八)

原田憲雄

(一〇三八)

浩歌

浩歌

〔浩歌〕 ・浩歌 大声で歌うこと。楚辭に「美人を望めども未だ来たらず。風に臨んで悦として浩歌す」(九歌少司命)という。美人とは、男女に関わらず理想的な対象で、主君や神を指すこともある。理想は実現しないから理想なので、美人は得られないのが常であろうが、悲しく憤ろしいことではある。そこで気が狂ったように大声で歌うのが「浩歌」である。この詩も九歌のように劇的な構成をとる。

(一〇三八)

南風が山を吹くうち平地となり

〇一 南風吹山作平地

天帝が水神天呉を派遣して海水を移転した

〇二 帝遣天呉移海水

西王母の桃の木は千遍も紅の花咲かせ

〇三 王母桃花千遍紅

長寿の彭祖も名医の巫咸も何度でも死ぬ

〇四 彭祖巫咸幾廻死

青葦毛の馬にぼちぼち銭形あらわれ

〇五 青毛驄馬參差銭

なまめかしい春の柳はうっとりかすむ

〇六 嬌春楊柳含細煙

琴ひくひとが金のジョッキを勧めてくれるが

「心と体がまだ固まらぬこのおれは何者なんだ」

「がぶ飲みするのはやめなさい 丁都護さん

この世の中の英雄によき主人なぞいるものですか

糸買って平原君とかいうひとの肖像を刺繍して

酒があるなら趙州の土にでも注いでおあげ」

水時計 時したたらせ 水にむせぶ玉の蟾蜍

「ミス衛さんよ 黒髪が薄くなつたげ櫛で梳けぬほど」

「秋の霜おく眉だつてみるみる新緑に換わるわよ

はたちになつた男の子がなんでそうクヨクヨするの」

〇七 箏人勸我金屈厄

〇八 神血未凝身問誰

〇九 不須浪飲丁都護

一〇 世上英雄本無主

一一 買絲繡作平原君

一二 有酒唯澆趙州土

一三 漏催水咽玉蟾蜍

一四 衛娘髮薄不勝梳

一五 看見秋眉換新緑

一六 二十男兒那刺促

〇二 「南風 山を吹き 平地と作す」 ・南風 礼記に「むかし舜、五弦の琴を作つて以て南風を歌う」

(楽記) といひ、孔子家語の伝えるその歌は「南風の薫ずる、以て吾が民の愠りを解くべし。南風の時なる、以て吾が民の財を阜かならしむべし」(弁楽) そうして南風は温和で万物を生育する、といわれ。だのにその南風が吹いているうちに、山も平地になつてしまふ。

〇三 「帝 天呉をして海水を移さしむ」 ・天呉 水の神。山海経に「朝陽の谷、神を天呉という。これを水伯となす。それ獸たり。八首人面、八足八尾、みな青黄」(海外東経) ・遣 使役の助動詞。

・山が平地になるものだから、天帝も仕方なしに、水の神に言いつけて海を移転させる。まるで二〇

世紀の日本を先取りしているみたいだが、天呉のやつ、その海水をどこに捨てていることやら。

〇三 「王母の桃花 千遍 紅なり」 ・王母 西王母。「閨月」(一〇三六) 参照。たちまち三百万年経過する。

〇四 「彭祖 巫咸 幾廻死するや」 ・彭祖 長寿の代表。彭祖は、神仙伝によれば、帝顓頊の玄孫で、殷代末期に七六七歳だったが老いぼれていなかった(太平広記二) ・巫咸 名医の代表。郭璞によれば、帝堯の掛り付けの医師で、死んで貴神となった(巫咸山賦序) ・長寿であろうが、名医であろうが、みんなほとんど死んで行く。 ・廻を楽府詩集などは「回」とする。

〇五 「青毛の驄馬 参差たる銭」 ・青毛驄馬 青葦毛の馬。「送沈亞之歌」(一〇一一) 参照。驄を文苑英華は「駿」とする。 ・参差 不揃いにいりまじっているさま。「四月」(一〇二七) 参照。 ・死ぬのがあれば、生まれてくるのもあるわけで、生まれたばかりと思つた葦毛の馬に、もう不揃いながら銭形の模様が出はじめた。

〇六 「嬌春の楊柳 細煙を含む」 ・なまめかしい美女のような枝垂れ柳が、かすみを帯びたような流し目をしている、というほどの意。 ・細を文苑英華は「湘」とし、楽府詩集などが「細」とする。

〇七 「箏人 我に勸む 金屈卮」 ・箏人 箏は琴の一種でもとは五弦竹身だったが、唐代のものは木の胴で十三弦だった。箏人はその琴を弾く妓女。 ・金屈卮 屈卮は曲がった取っ手のついた杯で今のジョッキにあたる。金は美称。ここでは金のジョッキとしておこう。 ・琴を弾いていたねえさんが「浮かない顔をしてるわねえ、ぐっとおあけなさいよ」といってジョッキをすすめてくれるのだが。

〇八 「神血未だ凝らず 身は問う誰ぞ」 ・神血未凝 神は精神、血は血気すなわち肉体。それが未凝と

は、しっくり和合していない。涙を文苑英華は「寧」とする。それなら安定しない。・身問誰　そう
いうおれはいったい何者か。意識過剰の青年によくある自己違和感である。浩歌する青年自身の言葉。
問を文苑英華は「是」とする。

○九 「浪りに飲むを須いず 丁都護」

・浪飲　文苑英華などが「亂舞」とする。・丁都護　悲劇的な

歌曲の合の手にいれる囃し言葉のひとつ。五世紀、宋の武帝の娘婿の徐達之が戦死したとき、帝は都護
の丁昨を派遣し埋葬させた。達之の妻は葬儀の模様を聞き、ひとこと聞くとびに「丁都護」と嘆声を発
した。「ああ、丁さん」というほどの意である。その嘆きを基に後の人が「丁都護の歌」をつくり、合
の手に「丁都護」と囃した。都を樂府詩集は「督」とする。意味の上では変わりはない。・この句か
ら後の四句は、酒を勧める女の言葉。

○ 「世上の英雄 本 主無し」 ・才能を理解する奴がいるとかいないとか、難しいことは知らないけ

れど、箸にも棒にもかからないのが英雄というものよ。そんな者に、この世間で、理解者とか、よき主
人なんているものですか。

○ 「糸を買って繡作せん 平原君」 ・戦国時代の、趙国の王族で宰相にもなった平原君はどうだい、

ですって。趙勝とかいきましたわね。「賓客を好んで数千」なんて、こないだ講談で聞いたわよ。でも
毛遂みたいな豪傑を、見抜けなかったって言うじゃない。しかしまあ、あれくらいの人物なら、糸買っ
てきて、歌舞伎絵みたいか姿を、刺繍したげてもいいけどね。

○ 「酒有らば 唯だ澆げ 趙州の土に」 ・あらまあ、すっかり酔っ払って。ジョッキをひっくり返し
たじゃないの。そんな余分のお酒があるのなら、趙さんとやらのその趙州の墓にでも、お供えに注いで

あげればよかったのに。 ・唯 宋蜀本は「惟」とする。

二三〔漏催し〕 水は咽ぶ 玉蟾蜍〕 ・二人がぼそぼそ喋っている間にも、水時計はどんどん水を滴らせ、

受け口の玉製のひきがえるが、ごぼごぼと咽んでいる。西京雜記によれば、広川王去疾が晋の靈公の墓から盗掘したもののなかに玉蟾蜍一枚があった（六）という。

二四〔衛娘〕 髪薄く 梳るに勝えず〕 ・衛娘 衛国の代表美人というほどの意。春秋時代の南子、漢代の衛子夫などいずれも絶世の美人だった。「娘」というのはおもに若い女性一般をさす語。 ・居眠り

からさめた青年が、相手の女性のひしゃげた髻に目をとめてからかう。趙の平原君をこきおろしていたミス衛さん。南子そのけの美人だと思ったのに、櫛で梳けぬほど髪が薄くなったじゃないか。こそこの

雪いまいずこ、というところだな。 ・髪 文苑英華は「鬢」とする。

二五〔看見せよ〕 秋眉の新緑に換るを〕 ・看見 俗語で、ごらん、というほどの意。宋蜀本は「看看見」とし、楽府詩集などの注が「羞見」とする。 ・秋眉 秋の霜をおいたような白い眉。 ・新緑 宋蜀

本が「緑」とし文苑英華などが「深緑」とする。 ・女もなかなか負けてはいない。婆さんで悪かったわね。弁天さまでも黴くちやになる日があるから、諸行無常。でもごらん、だからこそ秋の霜おいたあ

んなの眉でも、そのうち新緑の柳みたいに生え変わろうというものよ。 ・この句に、旧注はみな不自然なむつかしい解釈を施している。

二六〔二十の男児〕 那ぞ刺促たる〕 ・二十 文苑英華は「世上」とするが、誤り。 ・刺促 二通りの意味があり、潘岳の「和嶠刺促休み得ず」（閨道謡）はコセコセ。賀の友人の父権徳興の「九歌沢畔

に傷み、怨思徒らに刺促」（数名歌）はクヨクヨ。ここではクヨクヨのほうである。 ・これも前の句

に続き女の言葉。権徳輿にも「浩歌」があり、不平を歌うものの「無何の郷に棲息せん」と莊子風に結び、賀より遅れて四十七歳の白居易がやはり「浩歌」を作るが「功名富貴須らく命を推すべし、命苟も来たらずんば知る奈何」それも仕方がないじゃないか、と悟ったようなことを言っている。めそめそ嘆いて女性からハッパをかけられるような浩歌をつくったのは李賀だけだ。それがかれの詩の、また思想の、独自なところ。だから、骨の髄から男尊女卑で凝り固まった人たちの理性にも、感性にも、受け入れられないのだ。

(一〇三九)

秋が来た

秋來

〔秋來る〕 ・文字通り、秋が来たことを歌うが、詩を作っても読者もない詩人の悲しみがにじむ。

(一〇三九)

桐の葉を吹き落とす風に驚き 壮士は苦しみ

〇一 桐風驚心壯士苦

衰えたともし火に キリギリス寒々と機を織る

〇二 衰燈絡緯啼寒素

一冊のこの詩集 誰がいったい読んでくれ

〇三 誰看青簡一編書

紙魚共に粉ふく穴をあけさせないでいてくれよう

〇四 不遺花蟲粉空蠹

嘆きに誘われ 今宵は曲がった腸も引きつるらしい

〇五 思牽今夜腸應直

雨冷たく 匂うような魂魄が詩人を甲いにやってきた

〇六 雨冷香魂甲書客

秋の墓場で幽霊がうたっている 鮑照のあの挽歌

〇七 秋墳鬼唱鮑家詩

恨みの血 千年後に土深く碧玉となって輝くだろうか

〇八 恨血千年土中碧

〇二 「桐風 心を驚かし 壮士 苦しむ」 ・驚心 戦国策「故瘡未だ息まずして驚心未だ去らざるなり」

(楚) 古傷を持っていると心も驚きやすい。 ・壮士 戦国策「壮士一たび去って復た還らず」(燕)

壯を文苑英華は「志」とする。

〇三 「衰灯 絡緯 寒素に啼く」 ・衰燈 火の勢いの衰えた灯。 ・絡緯 もとは糸を紡ぐという意味

で、声の似ているキリギリスやその類の虫をいうようになった。鮑照「枯桑葉零ち易く、疲客心驚き易し。今茲亦何ぞ早き。已に絡緯の声を聞く」(秋日示休上人) ・寒素 いろいろの意味があるが、こ

このは寒々とした白糸。

〇三 「誰か看る 青簡 一編の書」 ・青簡 書物一般をいう。竹のふだ(竹簡)の青い面を火に炙って油をとり、漆で文字を書いた。それが書物のもとの形。ここでは鈴木説のように李賀自身の詩稿を指す

のだろう。

〇四 「花虫をして粉として空しく露せしめざる」 ・花蟲 紙魚のことであろう。 ・粉 紙虫の食った

後に粉が残る。 ・この句について邱象随は「書を捨てて観覽に任せざるの意あり」という。いっそのこと紙魚がこの詩稿を食い破って人の目に触れさせなくしてくれたらいい、といったことであろうか。おもしろい解釈だが、詩の後半から察して、拙訳のごとくであろう。

〇五 「思い牽きて 今夜 脚 直かるべし」 ・思牽 前の句までの思いに牽引せられて、曲がっておる

べき腸も硬直するだろう。

○六 「雨冷やややかに 香魂こうこん 書客しよきゃくを弔う」 ・香魂 詩を理解するひとの魂魄。 ・書客 文学者。李賀

自身を指す。

○七 「秋墳しゅうふん 鬼は唱う 鮑家ほうかの詩」 ・鮑家詩 李賀が愛読した鮑照ほうしょうの詩。「代蒿里行」「代挽歌」のよ
うな弔い歌がある。「地下ふかく独り棲み、想い出す昔高台に登ったことを。生きてるときは傲岸で、
物を物ともしなかった。墓穴が閉じるとともに、白蟻がやってくる。生前の芳しい肉体は、虫どもに食
い荒らされる。黒髪も根こそぎなくなり、觸體が青苔に転がった。思えば昔は酒好きで、青梅を肴にし
たものだ。彭、韓、廉、蘭の連中も、とつくの昔に灰になった。壮士がみんな死に尽くす、ほかのどい
つが生き残れよう」(代挽歌)

○八 「恨血こんけつ 千年 土中に碧みどりならんか」 ・莊子によれば、春秋時代末期、周の賢臣の襄弘ちやうこうは国力の維持
に努めたが、かえって主君の敬王に車裂きにされた。蜀の人が哀れんでその血を蔵しておいたところ、
三年たったら血は碧玉になっていた(莊子胠篋、外物)世間の人に読まれもせぬ詩のために骨身を削っ
た詩人の血も、千年のちには碧玉になっているだろうか。

・劉辰翁が「この詩は長吉自身の挽歌ではないか」といっているのは、事実かどうかは別として、鋭い
批評だ。

(一〇四〇)

天帝の御子の歌

帝子歌

〔帝子の歌〕　・帝子　天帝の娘で湘君、湘夫人、湘妃などとよばれる神話の人物。賀は他の処でもたびたび歌っているので、ここでまとめて説明しておこう。山海経に「洞庭の山、帝の二女これに居る」といい、郭璞の注に「天帝の女、江に処りて神となる」という。洞庭湖（湖南）の島山に天帝の二人の娘が住み神として祀られた、というのである。漢の劉向の列女伝では、二人は帝堯の娘で、姉が娥皇、妹は女英、ともに舜と結婚し、舜が天子となると娥皇は后、女英は妃となった。舜が蒼梧で死ぬと、二人は湘水に身を投げて死に、その神となり「湘君」と呼ばれた、という。帝堯も天帝とよばれることがあるので「天帝の子」が「帝堯の子」となり、帝堯のあとを継いで天子となった舜の妻とされ、舜の死によって、二人も死に湘水の神となった、というふうには整理されている。史記によれば、秦の始皇は衡山に行こうとして湘山の祠で大風にあい進めなくなった。湘君はいかなる神か、と問い、博士から「堯の娘、舜の妻で、ここにまつられたそうです」と聞くと怒って、囚人三千人を使って湘山の樹木を切り払い赤裸にした（秦始皇本紀）という。また晋代の書といわれる湘中記に「舜の二妃、死して湘水の神となる。故に湘妃という」とあるので、唐代までに「湘君」「湘妃」の両様の呼び方が成立していたことが分かる。しかし湘君とともに楚辞に見える湘夫人と湘妃とははっきり区別されることはなく、列仙伝の江妃とさえ混同することもあったらしい。ところが韓愈が「堯の長女娥皇は舜の正妃だから君といつてよいが、女英は第二夫人だから降格して夫人というべきだ。楚辞の九歌に娥皇を君といい、女英を帝子といっているのは、そのところを区別しているのだ」（黄陵廟碑）と神話の儒教的な体系化を進める。賀が歌う湘妃は、舜の死を聞き、悲しんで泣いた涙が竹に滴って竹を斑にし、二人は投身し水神となった（「李憑箏篋引」一〇〇一参照）というほどの古形の神話を基盤にし、「帝子歌」でも、神の

来降を乞い願うけれど、空しく待ち望むのみ、という楚辭の九歌の主題を変奏する趣きが濃厚である。

(一〇四〇)

洞庭湖の名月が照らす一千里

〇一 洞庭名月一千里

涼しい風 雁がね 水に映る天

〇二 涼風雁啼天在水

九節の菖蒲が石の上で死んだところ

〇三 九節菖蒲石上死

湘水の神々は琴ひいて天帝の御子を待ち望む

〇四 湘神彈琴迎帝子

山上の老いた桂は古めかしい香りを放ち

〇五 山頭老桂吹古香

雌の龍かなしみさけび 寒さむと水ひかり

〇六 雌龍怨吟寒水光

砂の浦べで魚を走らす白石郎

〇七 沙浦走魚白石郎

いたずらに真珠を採って龍堂に供えるばかり

〇八 閑取真珠擲龍堂

〇一〔洞庭 名月(帝子) 一千里〕 ・帝子 蒙古本などが「名月」とし、それがよい。 ・一千里

願況「鼎湖一去三千里」(悲歌六)の時間を空間に移したような表現。

〇二〔涼風 雁啼 天 水に在り〕 ・涼風 礼記「孟秋の月、涼風至る」(月令) 涼を錦囊集は「涼」とする。

〇三〔九節の菖蒲 石上に死す〕 ・九節菖蒲 神仙伝によれば、漢の武帝が嵩山で仙人に会った。仙人は、この山の石の上に生える菖蒲で一丈九節のものを服すれば長生する、と行って消えた。武帝が採集させて飲んでみたが、気持ちが悪くなってやめた。王興という男が聞いて飲み続けついに長生きした。

それが「死す」とは、仙薬さえ枯れてしまうような絶望的な場所、の意であろう。曾益は、帝子が神となつてもはや人間世界に帰つてこないことをさすのだ、という。死を錦囊集は「宛」とする。それならうねうねと続いている、の意になるが、よくないだろう。

○四〔湘神〕 琴を弾じて 帝子を迎えんとす 湘神 湘水付近のもとの土地の神々。帝子が湘の神になつたのち、帝子に従属するものとされた。

○五〔山頭の老桂〕 古香を吹く 帝子は現れようとせず、桂（木犀）が古代の香りを放つのみ。

○六〔雌龍〕 怨吟して 寒水光る 雌龍 湘神が雄の龍で、その夫人なのである。

○七〔沙浦に魚を走らす白石郎〕 白石郎 古楽府に「白石郎」二首がある。「白石郎、江に臨みて居る。前に導くは江伯、後に従うは魚」「石を積み玉の如く、松を列ねて翠の如し。郎の艶なる独絶して、世にその二なし」というから、水の神の大物で、美男なのである。

○八〔閑に真珠を取つて 龍堂に擲ぐ〕 閑 等閑と同じで、むなしく。旧注の多くが閑静の意にとるが、よくない。龍堂 帝子を迎える殿堂。九歌に「魚鱗の屋、龍の堂」（河伯）という。それを転用した。真珠を捧げるのは、帝子の歡心を得ようとするのだ。しかしその好意が「閑」むだである。

(一〇四一)

秦王の飲酒

秦王飲酒

〔秦王の飲酒〕 秦王 秦は、インドや西域諸国が中国をさす呼び方のうち、よく用いられるもの。

従つて秦王とは、中国の王である。「長歌統短歌」(二一〇一)にみえる秦王は、詩人の魂によつて理想化された中国の王だが、ここのは「中国の世俗王」であり、飲酒とは、その俗王の「狂乱の酒宴」である。この詩は、唐の太宗と近臣が作った聯句の替え歌で、聯句は章述『兩京新記』王応麟『玉海』によれば次の通り。

貞観五年、太宗、突厥を破り、兩儀殿に於て突利可汗を宴し、七言詩柏梁を賦す。

御製 絶域降附天下平 地の果ての国々が降伏付屬し天下は平和となった

神通曰 八表無事悦聖情 八方いずれにも事がなく聖上のみ心は悦びたもう

無忌曰 雲披霧斂天地明 雲ひらけ霧おさまつて天も地もあきらかだ

元齡曰 登封日觀禪雲亭 泰山日觀峰に登り天祭り雲雲山亭亭山で地を祀る

蕭瑀曰 太常具礼方告成 太常のつかさは礼儀をそなえ事の成功を告げ奉る

「柏梁」とは、もと漢の武帝の作った宮殿で、そこで帝が群臣とともに作った七言詩が、中国聯句の始まりとされ、のち聯句の代称となった。唐の太宗は漢の武帝に倣ひこれを越えようとした天子で、聯句もその例の一つである。聯句の行なわれた殿名の「兩儀」は、天と地を指す。全唐詩は作者をそれぞれ、帝、淮安王、長孫無忌、房玄齡、蕭瑀とする。淮安王とは李賀の五世の祖の李壽、字は神通である。唐が突厥を征服したのは六三〇年一月から二月にかけてで、蕭瑀が太常少卿から御史大夫に遷るのがその二月末だから、貞観「五年」とあつたのは「四年」と改めるべきであろう。この聯句は、太宗の句の「絶域」を李神通、「降附」を長孫無忌、「天下」を房玄齡、「平」を蕭瑀が、それぞれに分散敷演したもので、敷演者の順序が近臣としての当時の序列だったろう。神通は、近臣といつても、太宗の父で

ある高祖の従弟だった。李賀の「秦王飲酒」は聯句のパロディだから、この詩の発想の出発点においては「秦王」は唐の太宗だったといえようが、成立した作品においては、唐の太宗に限定されない、普遍的な「秦王」となっている。では、普遍的な「秦王」とはなにか。「權力を集中して恣ほしまに行使する世俗の王」の象徴、とみるべきであろう。そうしてこの詩の主題は、中国の世俗王を仏典にみえるインドの世俗王の転輪聖王てんりんじょうおうに対比し、風刺し、さらに權力一般の虚偽性を剥離提示しようとするにあるのだと、わたしは解釈する。・飲酒 宋蜀本は「飲」とし、朝鮮本は「飲酒歌」とする。

・この詩をめぐって、近年、日本でも、中国でも論争が盛んだった。論点の主なものは二つ。その一は、秦王とは誰か。これに四説。(1) 秦の始皇 (2) 唐の徳宗 (3) 唐の太宗 (4) 特定の人物に当てる必要なし。その二は、この詩の主題は何か。これに三説。(1) 風刺 (2) 頌歌 (3) 人生短促の嘆き。拙稿「秦王飲酒」(李賀研究一五)にそれらの詳細を記し、また「唐の太宗」(李賀研究五)「李神通」(李賀論考)などが参考になるだろう。

(一〇四一)

秦王は虎に乗り 八方の極地に遊ぶ

劍の光り空照らし 天は翳って碧になった

羲和 日輪に鞭を打ち 玻璃 声をあげ

劫末の灰 飛びつくし 昔も今も べったりだ

龍の頭 銅の樽に酒注ぎ 酒星まねき

とうとうと 夜半にはやす 黄金の琵琶

○一 秦王騎虎遊八極

○二 劍光照空天自碧

○三 羲和敲日玻璃聲

○四 劫灰飛盡古今平

○五 龍頭瀉酒遶酒星

○六 金槽琵琶夜悵悵

洞庭の野を駆けつけた 雨足が笙の笛を吹く

酒宴最中 月に喝いれ 逆さまに進行させるが

銀色の雲しずしずと 宝玉の御殿の 明るいこと

宮門の時報係に 《午後の八時》と触れさせて

花やかな高樓は 玉碎け鳳凰叫ぶ声なまめき

人魚のうすぎぬ 真紅の紋 香りほのかに

美酒《黄鵠》 たたら舞いする 千年万歳の杯で

仙人像の燭台に 立ち並ぶ蠟燭の 煙かるく

神女青琴の 酔いしれた眼から さめざめ涙溢れる

〇七 洞庭雨脚來吹笙

〇八 酒酣喝月使倒行

〇九 銀雲樹榭瑤殿明

一〇 宮門掌事報一更

一一 花樓玉鳳聲嬌瘳

一二 海精紅文香淺清

一三 黃鵠跌舞千年觥

一四 仙人燭樹蠟煙輕

一五 青琴醉眼淚泓泓

〇二〔秦王 虎に騎り 八極に遊ぶ〕 ・騎虎 虎は、説文に「山獸の君」というが、礼記に「苛政は虎

より猛きなり」(檀弓)と薄悪に喩える。賀の集中に現れる虎は卑屈(馬詩一五)殺人(古鄴城童子謡)

凶悪(猛虎行)荒侈(梁台古意)：：の象徴ないし譬喩だから、ここだけが例外ではないだろう。秦王

はその悪獸に騎乗する。転輪聖王も世俗の王だが、常に天神の先導する金輪こんりんに従い、白象や紺馬にのり

(長阿含経、世記経転輪聖王品) 東西南北にゆく。 ・八極 八方極遠の地で、八荒ともいい、荒蕪野

蛮の地とされる。狂子「列御寇、伯昏无人の為に射る。无人曰く、これ射の射にして不射の射に非るな

り、と。ここにおいて无人高山に登る。：：曰く、それ至人は上は青天を窺い、下は黄泉に潜み、八極

に揮斥するも、神氣変ぜず」(田子方) 転輪聖王の軍隊は怨敵を服するに兵仗を用いず(長阿含経、転

輪聖王修行経) 正法を以て治化し、身みずから殺生せず、人をして殺生、偷盜、邪淫、兩舌、惡口、妄言、綺語、貪取、嫉妬、邪見せざる人たらしめる(世記経) これこそ「不射の射」であろう。

○三「劍光 空を照らし 天あめ自みづから碧みどりなり」 ・ 劍光 転輪聖王は十善の徳によって日天子となり、日

天子は自身光りを放って金殿を照らし、金殿の光りは日宮を照らし、日宮の光りは出でて四天下を照らした(長阿含経) 秦王の劍が光るのは、四天下に遍照する日宮の光りの反映に過ぎぬ。反映の照らすのは空虚であって、四天下でも八荒でもない。日光を受けはするが、受けた劍は殺人の具。反映はもはや万物を撫育する日光ではない。秦王の遊行を、青天を窺う至人の業と混同しえないだろう。曾益が「劍光り空を射る。殺氣盛んなるなり」という所以だ。 ・ 天自碧 天の蒼蒼として青いのは自みづから青い

ので、秦王には関わらぬ。しかし騎虎秦王の殺人劍の妖光が空虚を照らすのを許せば、天も変化せざるをえない。青天は自みづから碧となる。賀の集中、碧漪(四月) 碧華(古悠悠行) 碧鳳(惱公) 春碧(難忘曲) のように美景妍姿に用いられるものもあるが、そのばあいも夜景や反映など消極的方向にかたむく。他面、土中碧(秋末) 土花碧(金銅仙人辞漢歌) 水碧(老夫採玉歌) 平碧(艾如張) 碧火(神絃曲) は、いずれも怨むべく、悲しむべく、憤るべく、怪しむべき情景の要の位置に点ぜられる色彩だった。陳本礼がこの句に「天も亦之を如何ともするなきなり」というのは、碧が天の不如意を現わす色であることの指摘だ。天に変化が生じ、夜、あるいは劫末の到来を告げるものであろう。

○三「羲和 日を敲つてば 玻はり瓊り(瓊)に声あり」 ・ 羲和 日輪の御者。「閏月」(一〇三六)「天上謡」

(一〇三七) 参照。書経「(帝堯) 四表に光被し上下に格いたる。…乃ち羲和に命じ、欽つみて晏びん天てんに若しい、日月星辰を曆象し、敬たみて人に時を授けしむ」 ・ 敲日 長阿含経によれば日天子は、自ら行く意なく

しかも捷疾に行くものだった。しかし天に変化を生じ、夜、あるいは劫末が迫るとなれば、日車は速度を上げなければならぬ。そこで羲和が日車に鞭打つ。・玻璃声 中国の神話でいう日車をインド神話に移せば長阿含經のいう「日宮殿」あるいは「日宮」である。日宮殿は天上の黄金と頗梨から成り、赫灼と光明を放つけれども、常に静かで音を立てない。だが天が変化し、羲和に敲打され、常ならぬ速度で、夜に、劫末に向かって疾駆せねばならぬとすれば、無言の頗梨も声を上げざるを得ない。頗梨は、梵語 *sphatika* の音写で、水晶あるいは古代のガラスを指し、別に頗璫（妙法蓮華經）玻璃（觀無量壽經）とも表記し、近代日本では玻璃の字面が常用された。底本は玻璃とする。「璫」は文字としては誤りだが、璫は梨と同じだから、長阿含を読んだとき印象に焼き付いた「頗梨」の字面が李賀の記憶の中で変化し「秦王飲酒」を制作するとき「玻璃」となって表出された、と考えられなくはない。

○「劫灰 飛尽し 古今平らかなり」・劫灰 劫火洞焼の余燼、すなわち世界（宇宙）が滅尽した後に残った灰。高僧伝「昔、漢武、昆明池を穿ち、底に黒灰を得たり。以て東方朔に問う。朔云う、委しくせず、西域の人に問うべしと。後、法蘭すでに至る。衆人、追いて以て之を問う。蘭云う、世界終尽するとき劫火洞焼す。この灰は是なりと」（一、竺法蘭二）竺法蘭は中天竺の人で六七年あるいは七五年に洛陽に來たといわれる。劫尽についての中国での最も古く確実な文献は、先に引いた經典を含む長阿含經で、それによれば、長久無量無限の時間を劫 (*kalpa*) といい、宇宙が成立と破壊を繰り返して循環する四時期を四事とも四劫ともいう。(一) 世間に三災が起こって崩壊する「壞劫」(二) まったく空虚な「空劫」(三) 天地が生成しようとする「成劫」(四) 天地が成立して崩れないあいだの「住劫」である。三災とは、火災、水災、風災である。火災の經過は、大黒風が暴起し、海水を二つに分け、八

万四千由旬（ヨージヤナ）の深さから日宮殿を取り出し、須弥山（スメール）の中腹の日道中におく。

このため世間に二日となり、あらゆる小さな河が枯渴する。同様に次々日宮殿が出現し、七日宮殿となつて、天地は全焼し、大地にも須弥山にも灰燼もなくなくなる。これが劫灰飛尽である。・古今平 劫灰

飛尽によつて空劫となるから。そこには空間も時間もない。時間のないところに過去も現在もない。まったくの空虚である。古今平とはそのような、のっぺらぼうの無時間の無空間で、この句以後に演ぜられる舞台は妄想の吐き出す幻影にすぎない。古今平を文苑英華は「今太平」とするが、誤り。

○五〔龍頭 酒を瀉いで 酒星を遼う〕・龍頭 龍の頭の形をした酒器。戴祚の西征記に「太極殿前に

銅龍長さ三丈、銅樽の四十斛を容るるあり。正旦の大会に、龍、腹内より酒を受け、口よりこれを樽に吐く」（北堂書鈔一四八）・酒星 孔融「天、酒星の曜きを垂る」（難曹公表制酒禁書）晋書「軒轅

の右角南の三星を酒旗という。酒官の旗なり。宴饗飲食を主る」（天文志）

○六〔金槽の琵琶 夜 根根〕・金槽琵琶 黄金の胴の琵琶。談寶録によれば、宦官の白秀貞が琵琶を

献上した。胴は金縷紅文でその模様は番いの鳳凰だった。楊貴妃が弹奏するたびに音韻凄清で雲外に漂う趣だった（邱象随所引）金槽を宋蜀本は「今槽」とするが、誤り。・根根 根は、物と物とが触れ

ることをいい、謝惠連の「古冢を祭る文」に、塚の中から出た木人が「物を以て根撥すれば、手に応じて灰滅す」という。根根は擬声音だが、新唐書には地獄の使者として現れる。「貞観十七年七月、民の

訛言に、官、根根を遣わし人を殺して天狗を祭ると。云う、その来たるや身に狗皮をき、鉄爪。つねに關中に於て人の心肝を取って去ると」（五行志）訛言とは、流言というほどの意。この年の二月に、太

宗は凌煙閣に功臣の肖像を描かせた。その中にはさきの聯句の近臣の、李神通を除く三人の像が含まれ

る。「天宝三載二月、星あり、東南に墜つ。墜ちしのち声あり。京師訛言す、官、根椶を遣わし、人を捕え、肝を取って天狗を祭ると」天宝は、玄宗が夢に老子を見、帝徳が天によって証明されたと称した年号である。賀が、この詩の金槽琵琶の声に「根椶」を選んだのは、この有名な「訛言」の不吉を熟知した上でのことであろう。

○七〔洞庭の雨脚 來って笙を吹く〕 ・洞庭湖に雨がふって、中国最大の湖面が荒れ、駭然雜然と鳴り響くように笙の吹奏が湧きかえる。莊子「北門成、黃帝に問うて曰く、帝、咸池の楽を張りしとき、われ始めて之を聞くや懼れ、また之を聞くや怠り、卒に之を聞きて惑う。蕩蕩黙黙として乃ち自得せざりき」(天運。拙稿『『莊子伝』参照)

○八〔酒酣わにして 月を喝して倒行せしむ〕 ・月を呼び返して夜宴享楽の時間を永久にしようとする。日を敲打して時間の進行を速めようとするのと反対だが、人間の恣意から出る点では同じ。前句とこの句、劫末の黒風が大海を吹き、大海がぼっかり二つに割れ、底から日宮殿が舞い上がってくるあの恐るべき場面が、夜の鏡に倒映するような、ふしぎな感覚を呼ぶ。

○九〔銀雲樹樹 瑤殿 明らかなり〕 ・瑤殿 月宮殿、すなわち月を指す。呼び返した月に照らされる秦王の宮殿とする解釈があるが、そうではなく、呼び返す人に関わりなく、銀雲の間を靜かに己の進むべき方向に歩みを運ぶ月宮殿なのだ。

一〇〔宮門の掌事に一更を報せしめ〕 ・宮門掌事 宮門の係官は、時報も受け持つのが例だった。・報一更 更とは、午後八時から午前六時までを五つに分けた時刻の称。月天子は、秦王がいかに倒行させようとしても倒行せず、その定まった進行を変えぬことが、銀雲の樹樹と瑤殿の明るさによって示さ

れると、秦王に媚びる側近が思いついて演出するのが、五更と報じるべき時間を時報係に命じて一更とふれさせることであつた。

二〔花樓 玉鳳 声 嬌瘳〕 ・花樓 朝鮮本は「花臺」とする。 ・玉鳳 「李憑箏篋引」(一〇〇

一)に「崑山玉碎鳳凰叫」というのと同様、玉の碎けるような音、鳳凰の呼び交わすような聲、である。ただここでは楽器ではなく、人間の聲で、嬌瘳も、嬌なる聲、瘳なる聲が、なまぐさく入り混じるのであろう。

三〔海精 紅文 香 淺清〕 ・海精 博物志に「蛟人は水居するも、出でて人家に寓し精を売る」蛟

人は人魚。述異記「南海より蛟精紗を出だす。一に龍紗と名づけ、価百余金。以て服となし、水に入るも濡れず」李賀より後の時代のものだが、北夢瑣言「張建章、水仙に遇い蛟精を遣らる。紅線三道をもつて之を劓す。夏天清暑に展開すれば、潢堂凜然たらしむべし」そのように珍らしく高価な、透き通るうすぎぬを、秦王の美女がまとして舞い、舞うにつれて清らかな香りがほのかにただよう。秦王の宮殿において人間の淫靡の飾りとされても、蛟精も真珠も、もとは水中仙界のもの。秦王の恣意に媚びて設定された虚偽の時間におかれはしても、蛟精そのものは大海の時間のうちに生きており、放つ香りは、深海中の穠郁は失つても、なおかつ真の時間の清浅は保ち、その香によって虚偽の時間を浸蝕する。

三〔黃鵝 跌舞す 千年觥〕 ・黃鵝 美酒の名。杜甫「鵝兒黃なる酒に似たり」(舟前小鵝兒) 鵝を文苑英華は「俄」とするが、誤り。 ・跌舞 けつまづくような足取りで舞う。これは道化がふざけた足取りで進み出て杯を進めるのであろう。 ・千年觥 觥は角で作った杯。秦王が千年觥と僭称する大杯に波立つ美酒が、その名の通りよたよた踊る鵝鳥の子のようだ。

二四「仙人の燭樹しょうじゆ 蟬煙せんえん 軽し」・仙人燭樹 仙人の像に作った燭台に、シャンデリヤのようにたくさ

んの蟬燭せんじゆが立ててあるのであろう。

二五「青せい（清）琴きん 醉眼さいがん 淚なみだ 泓泓おうおう」・清琴 文苑英華は「青春」とするが、注に「集に青琴に作る。

神女なり」という。ここではその注に従う。司馬相如が「かの青琴、宓妃の徒の如き、絶殊離俗、妖冶媚都」（上林賦）という。この賦でそうであるように「青琴」は「秦王」に侍る美女である。だがそこから世俗性を捨象すれば、やはり古神女だ。穆天子伝で、中国の王の鶴を受けて「将ながわくは子こよ死するなかれ」といった西王母は神女だった。宴は共にしても中国の王が死すべきものであることを知っていたのは「死するなかれ」の語に現れている。巫山の神女も楚王に枕席を薦めはしても、去って雲雨となり、王の世俗性を哀れんで、再び来なかった。転輪聖王の宮中では高幢の上に光を放って夜の大地を照らす神珠寶も、秦王の宴席におかれると、道教風の古怪な仙人に墮落して、臭い蟬煙を放って劫末の腐敗を予兆せざるをえない。転輪聖王の伴侶として、その欲望を慈悲に転化させる玉女も、秦王の宮中では青琴となり、長夜の宴に酔いはしても、秦王がついに聖王でないことを知り、眼に涙をいっぱい浮かべていたのであろう。

・「秦王飲酒」の全体が唐の太宗らの聯句に似ること、以上の通りだが、さらに「秦王飲酒」の初二句が太宗の句に、三四句が李神通の句に、五一九句が長孫無忌の句に、一〇一―一三句が房玄齡の句に、一四と結句が蕭瑀の句に、対応する。また「秦王飲酒」の初二句の韻字、極と碧は、李神通が敷演した太宗の「絶域」の二字と同じ入声で、対応し、それ以外の三一―一五句の韻字は下平声で、聯句の脚韻と共通する。

※前号正誤 第一七〇号 一三頁五―九行 〇九→一一 一〇→一二 一一→一三 一二→一四 ※本号は二〇頁。